

題名	著者	コメント	評価
誰か (実業之日本社)	宮部みゆき	宮部さんの新刊が出ていたのさえ知らなかったところに、健ちゃんが発行日より前に古本として手に入れて持ってきてくれた。さすが健ちゃん、蛇の道は蛇。話自体はおとなしめで、読みながら宮部さんが書いているのを忘れてしまいそうだった。	☆☆☆
沙羅は和子の名を呼ぶ (集英社)	加納朋子	短編集と連作集。初めて読む作家だけど、一度に二冊買った。連作の「ガラス・・・」は薄味。記憶に残りそうもない。短編の方も表題作が印象に残るくらい。	☆☆★
ガラスの麒麟 (講談社文庫)			☆☆
いじん幽霊 完四郎広目手控え (集英社)	高橋克彦	もと武士の完四郎が不思議を解決していくシリーズ第三弾。横浜に居を移しても完四郎の浅見光彦的特別待遇は同じ。それに慣れれば、幕末時代の横浜の風景や、新聞作りなどの話で面白く読める。第四弾の完四郎の活躍の場は、いよいよ海外に移りそう。	☆☆☆★
カルト39 【刑法三十九条】 (角川文庫)	永井泰宇	恰も理想的に思える共同生活の場所へ精神科医が潜入し、大勢の人間が洗脳されていく過程を見つめる。きっかけこそ派手な殺人事件だけれど、真犯人が別にいるということもおまけのようなもの。この団体を否定していた人が、たった1週間で感動の涙を流して受け入れていく様はちょっと信じられないけど、現実にこんな話がないわけじゃないのが怖いね。催眠術にもすぐにかかりそうな私はこんな場所で講義を受けたらすぐに入会してしまいそう。クワバラクワバラ…。	☆☆